

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 竹 内 愛
論文題目

伝統社会に生きる女性の幸福向上のための開発論
-ネパールの旧王都パタンにおけるネワール民族の女性
自助組織「ミサ・プツァ」の自発的な活動を事例と
して-

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	宮原 勇
委員	名古屋大学教授	田村 均
委員	名古屋大学教授	金山 弥平
委員	名古屋大学教授	佐々木 重洋

【本論文の概要】

第一部理論編（開発の思想）の第1章「開発における正義とは」では、近年の開発思想の動向と国際機関や各政府の提起する指標を検討し、「開発」の問題点を提示した。そして、第2章「ケイパビリティ・アプローチ」では、ロールズ以来の正義論の、アマルティア・センによる再構築の試みを検討し、その妥当性の検証と問題点を摘出した。そして、センの路線を近代主義的なリベラリズムから発展させたマーサ・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチの試みを検討した。普遍的なケイパビリティの要素を明示化することにより、発展途上にある社会の中で抑圧されているグループや階層が「矮小化された選好や満足感」とどまるのではなく、謂わば目覚めるために、「普遍的価値」としての「人間の中心的な機能的ケイパビリティのリスト」を提示する必要性を説いたヌスバウムを検討し、その問題点を指摘した。第3章では、さらに徹底して「ケイパビリティ・アプローチ」を検証し、センの「ケイパビリティ・アプローチ」の限界をく他者との関係の視点の欠如>に見て取り、ケイパビリティを発揮する際の「抑制要因」と「促進要因」という概念を設けることの必要性を説く。

第二部 フィールドワーク編（事例研究）では、第一部で提示されたケイパビリティを発揮する際の「抑制要因」と「促進要因」という視点でもって、ネパールの旧王都パタンに居住するネワール民族女性自助組織「ミサ・プツァ」の形成と発展を分析している。特に、本来開発の目的ではなかったような社会の変化とジェンダー平等の意識の形成が見られることを確認している。そして、第8章<「境界論」と伝統社会の女性の接点>では、メアリー・ダグラスの「ケガレ」概念の解釈を手がかりとし、ケガレの社会的機能や倫理的機能を検討し、ともすれば「ケガレ」概念に由来する「不利な」扱いを受ける、農民カースト「ジャプ」の<女性>の潜在的創造能力の評価を行っている。終章<伝統社会の女性の幸福増大のために>では、女性自助組織「ミサ・プツァ」の活動による女性たちのケイパビリティ（選択の幅）の増大と、実際の機能の促進という現象を報告している。最終的には、「ミサ・プツァ」での女性たちの能動的活動の原動力は、帰属集団の利益を優先する「利他的」な志向であると説く。ネワール女性の活動をケイパビリティ・アプローチの公式から分析するには、女性たちのケイパビリティ発揮の過程における促進要因と抑制要因を明確にし、個人中心の近代化された社会でのケイパビリティ概念ではなく、伝統社会の女性のための新たな開発論の観点、つまり共同体指向型の利他的要素が強力な促進要因になるというモデルの必要性を説いている。

【本論文の評価】

本論文は、申請者のこれまでの文化人類学的調査研究の成果をふまえて、ジェンダー論に関する研究、さらにロールズやアマルティア・セン、ヌスバウムらの正義論や厚生経済学での規範論的議論を幅広く扱った意欲的研究であり、申請者が長年のフィールドワークによって得られた具体的資料を基に論じた説得力ある議論となっている。個別的には次のような点が評価できる。

まず、アマルティア・センのケイパビリティの概念に関して、財、財の特性、当人の能力、その当人の有様・状態、そして当人の具体的な効用としての幸福といった項目に関する関数を明確にフォローしつつ、幸福度の算定には、自分自身による評価の値の関数が組み込まねばならないことを関数の表示として示し、当人の能力がそもそも発揮できるか否かに関して抑制要因と促進要因があることを明確にし、本論文の結論部分でその二つの要因を考慮した議論につなげた点は高く評価できる。

次に、ヌスバウムの普遍的で、個人主義的規範意識からの開発論は、先進国からの発展途上国への「啓蒙」という特質を持つもので、発展途上国の女性といった立場でのケイパビリティに関しては、適切な理論であるとはいいがたいことを実際のフィールドワークの調査から指摘した点は優れた議論であると言える。

フィールドワークについては、民族誌的調査の成果の記述方法に瑕疵がないとは言えない点は、否定的な評価をせざるを得ないが、しかし申請者自身の長年にわたるネワール族の調査からカースト制度の実態やジェンダー間の不平等、そして女性をめぐる「ケガレ」意識の現実に関する指摘は、貴重な貢献となっている。

また、女性自助組織ミサ・プツァの活動に関しても、その活動を支援する幾種類かのメディアーターの活動や男性儀礼組織との対比などに関して、長年にわたり調査を続けてきており、そのような自助組織の意義が本来の目的とは違った点に見出されることが指摘されている。つまり、ミサ・プツァの活動は、個人の自立よりも共同体に方向付けられた「利他的」な志向によって社会的奉仕活動として組織化され活性化されているため、伝統的な価値観の枠内にとどまりつつも、その限りで意義のあるものとして展開されている。この点の指摘は貴重な成果として評価できる。ただし、そのような活動が、根強いジェンダー・カースト構造に変革をもたらす「コムニタス」(ターナー)の力を持つかのような申請者の見解は性急すぎるとも言える。とは言え、この点は論文全体の価値を損なう程の瑕疵ではないと判断される。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判断した。